

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察注意報について（送付）

このことについて、令和6年度（2024年度）病害虫発生予察注意報第9号を公表しましたので、送付します。

注 意 報

令和6年度（2024年度）病害虫発生予察注意報第9号

農作物名 トマト
病害虫名 トマト黄化葉巻病
病原ウイルス トマト黄化葉巻ウイルス
Tomato yellow leaf curl virus（以下、TYLCVとする）
媒介昆虫 タバココナジラミ

- 1 発生地域 冬春トマト栽培地域
- 2 発生時期 3月上旬以降
- 3 発生程度 平年比 多

4 注意報発表の根拠

- (1) 県内の冬春トマト栽培ほ場で実施した巡回調査では、1月以降トマト黄化葉巻病の発病株が大きく増加している。2月のトマト黄化葉巻病の発病株率は、4.7%（平年1.8%）で平年比やや多の発生であった（図1）。過去15年の2月の巡回調査結果と比較すると、黄化葉巻病が多発した令和3年度（2021年度）に次いで2番目に多かった（図2）。
- (2) 病害虫防除員の報告によると、2月の発生は平年比やや多～並であった。
- (3) 県内の冬春トマト栽培ほ場で実施した2月の巡回調査では、タバココナジラミの寄生葉率0.3%（平年0.4%）と平年並の発生であった（図3）。
- (4) 今後、気温の上昇に伴い、TYLCV媒介虫であるタバココナジラミの活動・増殖に好適な条件となる。また、福岡管区气象台が2月27日に発表した九州北部地方1ヶ月予報によると、気温は平年より高いか平年並の予想である。

5 防除対策

施設内でのウイルス病の感染拡大を防ぐため、タバココナジラミの防除と発病株の適切な処分が重要である。また、施設内での感染拡大を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らすことにもつながる。

- (1) 施設内に黄色粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。既にコナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う。
- (2) 薬剤防除を行う場合、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行う。なお、天敵や交配用のハチを導入しているほ場では、薬剤の選定に留意する。
- (3) 発病株は重要な伝染源となる。TYLCV抵抗性品種であってもウイルスを保毒

し、伝染源となる。

(4) 栽培後期にかけては、地域（野外）に保毒虫が拡散して次作へ持ち越すことを防ぐため、以下の保毒虫を施設外に「出さない」対策を徹底する。

ア 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無い点検し、破損部は修繕を行う。

イ 成虫に効果の高い薬剤を主体とした薬剤防除を行う。

ウ コナジラミの施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。

エ 悪天候などで作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。

オ 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。

カ 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

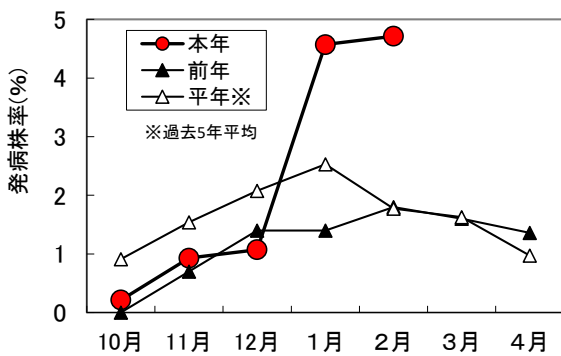


図1 黄化葉巻病の発病株率の推移 (冬春トマト7ほ場平均)

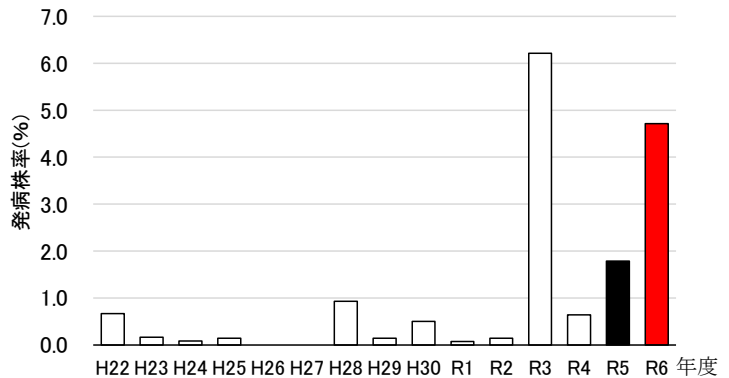


図2 過去15年の2月の巡回調査における黄化葉巻病の発病株率
※各年7～8ほ場の平均。抵抗性品種と感受性品種の比は年により異なる。

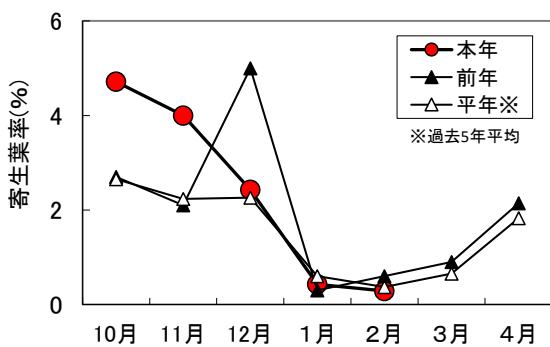


図3 コナジラミ類の寄生葉率の推移 (冬春トマト7ほ場平均)



写真1 黄化葉巻病発病株 (令和7年1月撮影・感受性品種)

熊本県病害虫防除所
(農業研究センター生産環境研究所内)
担当：福岡、肥後 TEL：096-248-6490